

本々な あんな本

関 治子

「幼稚園」

— 人間関係の 生活の場 —

K・H・リード 著
宮本美沙子 訳

幼児の教育は、経験浅い初心のころも、また年数重ねた時も、いつも、これだけでよいのだろうか、迷いが心の中心をゆきまわっています。そんな時は、この本を読んで、この本と対談することになっています。

この原著は、幼児教育のテキストと

して、ひろく世界で利用されているようですが、この本の特徴は次の点に要約されています。

(一) 子どもの行動を観察し、理解しながら、子どものレディネスと個性を正しく見きわめていく。

(二) テクニクによるよりも、真の人間関係の樹立という態度に立脚しながら、子どもに接近する。

(三) 成長意欲の盛んな子どもの心身の欲求を満たしてやるような、よりよい学習の場を提供してやる。

(四) 子どもに接するおとなは、おとな自身が、自分を正しく理解し、成長していかなければならない。

子どもを教育するのに、現場の人間は、つい現実の目先の行動にとらわれてしまいがちで、理論家は理論的に思考してくれます。私たち現場の人間は、目標をあやまたずに現実に対処してい

かなくてはなりません。

この本では、たとえば、どういった人間関係の理解を深めながら子どもに要求に答えられるか、というようなことについて、その理論と指針が具体的にあげられています。

——自立精神を養う最大の機会を与えるために、助力は最小限にすること。

最小限の助けを与えるということは、子どもが高い所のものを取ろうとする時に、それを取ってやることでなく、取るのに必要なものをどうやって準備するか、を教えることである。このことは、子どもに十分時間を与えて問題を解決させることであり、おとなはいりこんで解決してやることではない。独立しようとする子どもの強い成長への衝動を十分満足させるために、子どもに自信をもたせるようにする。しかしながら、子どもに物事をさせると

ものと考えます。

いうことは、子どもの依頼を拒否することではない。子どもは依頼によって、先生との人間関係を求めている。子どもに好意的で惜しみのない人間関係をもってやるのが大切である。他人から信頼され、価値づけられていると思えば自信が出てくる。子どもが助けを求めてきた時は、頼みに応じてやる。

私たちは、子どもが必要としている助力だけを与えるのである。――

この中には、さらに具体的に場面があり、話し方や行動の仕方までくわしく書かれています。

幼稚園では、子ども同志、子どもと先生、子どもとおとなという人間関係が非常に重要であって、これによって子どもの成長発達がささえられている面がかなりあると思います。私たちは、この本を折にふれては読み返して、ヒューマンリレーションを大切にしたい

「もりのまつり」

中谷千代子

文・画

シカゴトリビューンの児童書フェスティバルで受賞というように、国際的に評価されている方です。

物語の背景は、北軽井沢の牧場。ここの作者のたび重なるスケッチと、四歳になるおいごさんと二カ月の生活の印象が、そのまま絵本になったようです。「ある秋、牧場のさくをはずしてウシがとび出し、ぞろぞろブタまでついて行き、番犬が先頭に立って近くの畑のあまいトウモロコシを、みんな食べてしまった」という牧場のおじさんの話が、ヒントになったそうです。

物語は――

牧場の動物の世話をするけんちゃん
と犬のタロは、毎日森へあそびに行く。
森で、かごいっぱい木の実や、やまぶ
どうを集めたおじいさんに出会う。「こ
んやは、森のおまつりをする。ぼうや
も、動物たちをつれておいで」と誘わ
れる。

夜になって、けんちゃんとタロは、牧場のさくをあけて、ウシ、ブタ、めんよう、やぎを森に導く。森の動物と、牧場の動物とは、トウモロコシを食べ、ごちそうをして交流し合う。おじいさんは、自分でつくったたくさんのおめんを出してきて、皆に好きなおめんをかぶらせる。たきびを囲んでおどりつける。けんちゃんは、ライオンのおめんをもらって、おじいさんと来年会おうと約束をする。翌朝、その森へ行ってみたが、おじいさんも森の動物もいない。――

物語は、牧場の生活から森の奥へ、ファンタジーの世界へとはいっていくのですが、はこびが、自然で素直であると思います。四歳児には、この物語の山とでもいうべき、森と牧場の動物たちがすきずきにおめんをかぶって、うしがとらになってもうもう、ぶたは

ぞうになってぶうぶう——というくだりが面白いと楽しんでます。このように、実際に幼児のおもしろがるものと、ファンタジーの世界とのかね合いが無理がなく、たくみだと思えます。絵はまた、一枚ずつが丁寧で美しく、色調の深みが、私たちの心を美しく洗ってくれます。一枚の葉の描写、また動物の表情の豊かさに、作者の観察力と暖い気持が、よく伝わってきます。ぶたのねむっている顔など思わずうれしくなって笑ってしまいました。

全体を通して、朝の牧場から森の中、夜の牧場、たきびの火、早朝と、絵の中に光が忠実にあらわされているのも印象づけられます。一つの絵本をつくるに当たって、子どもをよく知った上でのこの努力と誠意が、こうした良心的で、格調の高いものを生み出したのだと思います。

終りに作者の言葉を引用させていただいて、また素晴らしい絵本の生れることを願っています。

——「おとなが美しいと感じるものは、子どもにも美しいはず。子どもの世界だからと、やたらに夢の世界に飛躍するのはよくありません。ファンタジーの世界こそ、リアリティーがほしい。わたしは、草花の一本一本まで心をくばって描きます」――

（お茶の水女子大学附属幼稚園）